

編集後記

2020年は世界中が新型コロナウイルス感染症の爆発的大流行に見舞われた一年であった。大規模な人の移動が感染拡大を引き起こすということで、旅行などの行動の自粛が求められた。それは海外旅行だけではなく、国内旅行も対象となった。感染が急激に拡大しているときには都道府県をまたいでの移動も憚られたのである。

本共同研究は沖縄を対象とする学際的研究を特徴としているが、県をまたいでの移動が自粛を求められる中で、例年行っている沖縄での現地調査も見送らざるをえなかった。現地調査だけではない。本学生涯学習講座「知りたいっちゃ沖縄、行きたいっちゃ沖縄」も今年度の開講を見送るとともに、講義終了後に行っていた沖縄への研修旅行も中止にした。思い返せば、筆者が一年間に一度も沖縄を訪れなかったのは随分と久しぶりである。よもやこのような事態になろうとは2020年1月頃には誰も想像だにできなかったに違いない。

これまで本共同研究でお世話になってきた名城大学教授の山里純一先生からは、八重山諸島の島々で行われている豊年祭などの祭祀儀礼が中止になったと悲鳴にも似たメールが届いた。歯がゆい思いが募る一方であったが、どうすることもできず、ただただ事態の収束を願うのみであった。この原稿をまとめている2021年2月の時点で未だに県をまたいでの自由な移動ができないでいる。残念というほかない。

筆者は、紅短歌会が発行する『くれない』という同人誌に、月一回、「地域文化を訪ねる」というコーナーでエッセーを書いている。この紅短歌会は沖縄の皆さんがメンバーとなって短歌を詠む会であり、その作品を同人誌『くれない』で発表しているのである。筆者は知人の紹介でこの『くれない』に毎月エッセーを投稿させていただいているのであるが、もちろんその内容は沖縄に関するものである。この一年間、たしかに沖縄に行くことはできなかったが、この『くれない』の執筆のおかげで、地理的には離れ離れとなっても、気持ちの上では常に沖縄と結びついているような気がしていた。この一体感は大事だなと感じている。この一年間は、過去に取りためていた沖縄に関する番組などを観て過ごすことも多かった。そこで新たな沖縄の魅力を発見することもでき、それがエッセーのネタにもなっていった。

本誌本号において、筆者は「沖縄の昔話と病」という研究ノートを執筆している。これも『くれない』で発表してきたエッセーが基になっている。筆者にとって、定期的にこうした原稿をまとめることが、沖縄について考える機会であり、そのたびに沖縄の新たな魅力の発見ともなっている。そして、こうして得た知見を本学生涯学習講座の受講生の皆さんと共有できることがとても楽しみなのである。

今後ともこうした御縁によって結ばれた人と人とのつながりを大切にしていきたい。そ

して、一日でも早く普通の生活を送れる日々が戻ってくることを切に願う。

(文責 今林直樹)